

医系学生と岡山県民医連をむすぶコミュニケーションマガジン

Medical*Times

2010 Summer

vol.10

Summer Special ver.

Special Edition

聞きたい!
女性医師の
結婚・子育て

SERIES 看護学生のページ



聞きたい! 女性医師の結婚・子育て

～男性も女性もいきいき働ける職場・社会に～

医師全体に占める女性医師の割合は年々増加し、近く3割を超えと言われています。国家試験合格者の3人に1人以上は女性です。しかし離職率も高く、全体で2割弱、20代では3割を超えています。現在子育て真っ最中の大谷医師を中心に、1年目の研修医2名を含む4人の女性医師で子育て事情、働きやすい職場・社会についてざっくばらんに語り合いました。

医師の子育て事情

—自己紹介をお願いします。

大谷…大谷です。医師5年目で、麻酔科の後期研修に入ったところです。大学の同期と卒業と同時に結婚して、福岡民医連の病院で子育てしながらの初期研修でした。子どもが入院したこともあって2年では修了できず、岡山協立病院で残りの研修を1年行って、修了したのが去年の4月です。

清水…清水です。県医師会の女医部会の副部長をしています。全国で女性医師が増えてきて、出産や子育てでの離職が医師不足の原因の1つと言われ始めました。水島協立病院は15～16年前から女性医師の会というのがあったので、岡山県医師会でも女性医師対策の取り組みを始めようという時に呼ばれて参加したのがきっかけです。

K…私も麻酔科志望なんです。どうして麻酔科を志望されたんですか?



大谷…1つは夫が麻酔科に入って、話を聞いて面白そうだなと思ったこと。もう一つは協立病院の麻酔科部長の木村先生が「子育てを支援します」とおっしゃって下さって、その出会いが大きかったですね。研修中の夜間の呼び出しは免除していただいて、日中はみっちり教えていただける。当時は主治医になるのは難しいか



清水 順子

プロフィール

倉敷医療生協・玉島協同病院内科医長、医師歴28年。高校生の子ども1人。岡山県出身、獨協医科大学卒。岡山県医師会女医部会副部長。

なというのもあったし、救急にも興味があるので、全身管理という面で近いかなと思って。

清水…麻酔科は学会の女性医師の復職支援プログラムとかも工夫されているよね。いろんな学会で取り込まれているけど、麻酔科と腎学会が結構進んでいると思います。時間が決まっているから働きやすいんだろうね。

大谷…そうですね。やはり女性の人数が多いということ、主治医にならないというのがあってと思います。

清水…協立病院は労働組合があって、労働基準法をちゃんと遵守して、医者も育休を誰に咎められることもなく、当たり前のように取れる。でも医師会の会合なんかに出ると、産休すら取れなかったというような話をいっぱい聞きますよ。すごく温度差を感じてびっくりした。

大谷…私も他院の女医さんとインターネットで情報交換しているんですけど。妊娠したんだったら辞めてくれ



とか、入局するんだったら妊娠は何年間はやめてくれとかは今でもありますよ。

M…うちの大学でも、新婚の先生に2年間妊娠禁止令が出ていました。「今は伸び時だからそれはやめてくれ」って。

清水…中小病院はむしろ女性医師が妊娠して、出産して、育児休暇を取ることについては、割と積極的に援助しようというところが多いんじゃないかな。一時我慢してもその後ちゃんと帰って来てくれる方を選びたい。ただ、代わりの要員があるかというほとんどの場合無いわけで、そこが難しいよね。

子育てとキャリア

M…子どもって、早いとこ産んじやった方がいいんですか?

一同…(笑)



大谷…良し悪しがあると思うよ。早く産む利点は、子育ては体力がいるから、若さでカバーできる。親を頼るにも親もいつまでも元気じゃないし。それと若い時に産んだ方が医学的に問題が少ないということ。あとは研修医の時のほうが責任が少ないというか、そう言ったら悲しいけど…。

M…周りの先生がカバーしてくれますもんね。

大谷…ただ、キャリアができていないうちにキャリアを積みにくくなってしまいうから、心の葛藤はありますね。後輩にどんどん抜かれていくとか、私自身もそれによく悩みます。

でも結局は授かりものなので、できた時、欲しい時が産み時だと思うし、やる気があれば道は開ける気が

します。どれくらい家事や子育てに力を入れたいかっていうのも、人によって違うしね。

清水…女医部会で色々な人に講演していただいたりする中で共通して言われるのが、「医者は経済的に少しゆとりがあるので、それを活かさないといけない」と。「何でも自分でしてしまおうと思うと絶対に無理がくるから、自分の好きなことは自分でして、残りの家事は人に頼むとか、そういうメリハリをつけて自分のキャリアを積んでいくべきだ」。

大谷…私の同期の人達でも定期的に掃除をしてもらいに来るとか、ご飯を作ってもらおうという人もいるし。でも研修医の間はベビーシッター代で給料が無くなってしまったり、若いうちに産むと、経済的に余裕がないというデメリットがあるかもしれないですね。

K…家事の分担はどうしているんですか?



大谷…家事は大体私がやるかな。できない時は母が手伝ってくれたりするんだけど。育児は結構分担できていて、保育園に送るのは夫。

M…いいですね。やっぱり手伝ってくれる人じゃないと。

清水…昔は夫は自分のキャリアを積むことを優先して、子育ては妻に任せるみたいな人が多かったけど、今は



大谷 まどか

プロフィール

岡山医療生協・岡山協立病院後期研修医。専門は麻酔科。医師歴5年。3歳と0歳の子ども2人。熊本県出身、旭川医科大学卒

ちょっと変わってきているよね。

大谷…結構男性の医師も積極的。保育園の送り迎えだとか、育児は結構されているように思いますね。

M…確かに。うちの兄もドクター夫婦で、奥さん押しのけて子どものオムツ換えています。

大谷…やっぱり、子どもと触れ合うのが楽しいんじゃないかな。夫も、私を助けるためじゃなく自分が父親として子どもに伝えたい、与えてあげたいって思っているから、積極的に関わることになってきたと思います。夫婦とも研修医だった頃は精神的にも余裕がなかったですが、キャリアを多少積めた今は、余裕ができてきたんだと思いますね。男性も女性も、仕事だけで自分の人生は満たせないし、家庭でもちゃんと居場所が欲しい。

モチベーションを保つ秘訣は…

清水…初期研修の頃に出産するって、想像しただけでもすごく大変そう。

大谷…大変でしたね。今は子どもももう一人増えたけど、私たちが最近やっと心に落ち着きができたというのか。

清水…大変だった時、もう辞めようかしらと
かって思わなかった？



大谷…毎日思っていました。でもずっと家に居ると、「仕事がしたい」って思うんですね。仕事から帰ってきた夫の話も聞かず、子どもと家の中でずっと過ごして、家事をしてってだけでは満たされなかったんです。女性医師が辞める理由は両立が大変っていうのもあるけど、仕事へのモチベーションと、周りの理解のかなと思います。

清水…周りの理解というのは、自分の家族の理解、同僚とか上司の理解、両方なのかな。

大谷…「子育てをしながらでも働きます」って言った時に、例えば院長クラスの方は応援してくださっても、一緒



に働いている仲間がどれくらい理解してくれるかが重要ですよ。

それに、経済的な問題が無く、いつでも辞められるという状況にあったとして、両立をしていくっていうのは、かなりのモチベーションが必要。

M…私の祖母は二人とも医者だったんですけど、一人は87歳で亡くなるまで、もう一人は88歳の今も現役の眼科医です。医者には引退がないものだと思っているんですね。だから私も結婚して辞めるなんて考えたことがないんですけど…。

K…大谷先生は、出産する前から「やる」って思っていました？



大谷…産む前は不安だったけど、「産むが易し」だったかな。踏み出してみると、いろんな助けてくれる人がいる。私自身もともと「当たって砕けろ」タイプというか。当たって砕けたこともあるけど、今のところはうまくいってるかな。

ただ、いろんな人のおかげでやって来られているってことを忘れないで、いつか何か恩返しができるように仕事を続けていこうと。それが今の私のモチベーションの源ですね。

子どもを産んでからのほうが明らかに仕事に対するモチベーションが上がりました。子どもに、社会で働くっていうことはいいことなんだよと伝えたいっていう気持ちもありますね。3歳の子はお母さんをお医者さんだと思っていないみたいで、毎日岡山に遊びに行っていると思っている。「毎日電車乗っていいねえ」って(笑)。

清水…子どもってとんでもないこと言うよね(笑)。

大谷…自分がやる気を示して、それに賛同してくれる人がいること。家族にしてもそうだし、職場には「こういう形なら仕事ができます」って相談させてもらえたら、いろんな道が開けてくる。ただそれが、どこの職場でもできるかっていうと難しいところはまだまだあると

思うんですけど。

清水…初期研修を福岡の病院に決めたのは、子育てしながら働ける条件を考えた？



大谷…いえ、職場を決めた後で妊娠したので。だから当たって砕けちゃった的な(笑)。そこでは子育てしている女性研修医は初めてだったんですけど、色々応援してくださって。夫の転勤で辞めざるを得なくなって、お世話になってばかりなのにと、今でも思い出すと心が痛むんですけど。

清水…多分その病院にとっては研修医で子育てしながら研修医を続けたという実績を得ることができたわけだから、よかったんだと思うな。病院も「あ、やれるんだ」って思っていると思うから。多分「もうこういうのは二度といやだ」とか、そういう風には思っていないと思うな。

大谷…「はぁ、今日も人に迷惑をかけた」とか、「先に帰って来てしまって、あれどうなったかな」とか常に色々思い悩んでいますね。で、遅くまで仕事をしたら子どもが保育園で待っていて、「はぁ、私って母親としてどうなの」とかね。一人ではできないからこそ、応援に足る存在じゃないといけないと常に思っています。「もうそういう女医さんは来て欲しくない」っていう風に思われたら、後輩の不利益になるから。

K…前例がないのにそういう風にされてきたのは凄くなって思います。私は学生時代、実習の時点で大谷先生の話は聞いていたので、そういう人生の選択肢もあるんだって思うだけで、何か人生が、未来が明るくなると思ったんです。

大谷…悪い前例にならないように頑張ります(笑)。

女性も男性も働きやすく

K…男性が育児休暇を取るの嫌がられたりしますよね。大学病院でも、取って大変だったっていう話は聞いたりするんで。

M…自分の旦那が実際、育児休暇を取ってくれたら喜んじゃうよね。

清水…最近、倉敷医療生協の場合は、妻が8ヶ月か9ヶ月か育児休暇を取って、終わる頃に夫が1ヶ月くらい取るっていうのが増えているよね。女性が働きやすい職場は男性も働きやすい職場って言うけれど。

大谷…男性の先生でも子育てだけじゃなくて、例えば、親御さんの介護をされている方もいるかもしれないし、ご自身の健康に何か問題があるかもしれないし。子育てしている女医が特別じゃなくて、色々な状況のドクターがみんなそれぞれに仕事をできる職場であればいいと思う。やっぱりそれには医師にある程度余裕がないと、と結局そこなんですけど。

清水…医療内容はどんどん増えていっている。私が学生の頃は、国家試験にCTが一枚出されるかという時代でしたから。昔に比べたらやるべきことは増えているよねえ。今胃カメラを予約するだけで、ほんと「伝票書きおばさん」かと思うくらい。

大谷…アメリカのドクターが早く帰れるのは、医者じゃなければできないことしかしないってことなんですよ。他の職種に任せられる部分は任せて、医師は医師にしかできないことをする。そういう風に完全に分業しているから、仕事として量がある程度抑えられているっていうのがある。

清水…今回そういう診療報酬がついたんだよね。医師事務作業補助加算。

—医師を増やすこと、診療報酬など様々な面からのサポートが必要ということですね。最後に、学生さんへのメッセージをお願いします。

大谷…あえて男性の学生さんに。「家事はできるように」。あと「女性のお医者さんと結婚するのならばぜひ仕事を続けさせてあげてください」と。

—ありがとうございました。

